



# お経のことば

年老いるまで戒は楽しく 信が確立することは楽しい

智慧を得ることは楽しく 諸悪をなさないことは楽しい

ダンマパダ (法句經) 象の章 333偈 訳：片山一良

本来、人が生きていく上での不安は必要悪と言えるもので、原始時代にしても現代にいても、我々は自然の脅威や他者からの暴力などを不安と見なすことで、備えやコミュニケーションを発達させて環境に適応して生きてきました。しかし、近頃の世相を見ていると、どうも我々は『不安』というものに対しての向き合い方が昔に比べて上手くいっていないような気がします。

そんな不安と少しでも上手く向き合う為のヒントとなれるよう、今回のお経はお釈迦様の肉声に近い原始経典の中から法句經 象の章の一節を選びました。四つの文節から構成されていますが、二つずつの対句として捉えてみると味わい深いものがあります。

注目すべきは四つの文節に共通する『楽しく』と『楽しい』という言葉です。仏教に於ける楽しいとは身勝手な享樂の意味ではなく、充実した心の豊かな状態の楽しさを表します。

一つ目の文節から順に見ていきます。「年老いるまで」の「まで」は「迄んでもなお」という意味に解釈するのが適切なようで、「戒」は以前にもお伝えした通り無目的に強制されたものではなく、自発的な戒めであり、目的や目標に向かっての戒めです。それを踏まえて言葉を足せば「年老いても目標をもって何かに励むことは豊かな生き方である」と前向きに解すことができます。さらに、ここで意味を切ってしまうと、その豊かな生き方の継続が次の文節に登場する「信が確立すること」に繋がります。

お釈迦様が仰る『信』とは何らかの情報を鵜呑みにすることでもなければ、コロナ禍の中で気受けよく多用されるエビデンス（科学的根拠）に裏打ちされたものでもないのです。もっと言えば、『信じる』という動詞として捉えるのではなく、『信』という形に現わせないものを自己の中で直向きに育てていき、やがてはそれを確立することが大事なのであって、ましてやそれを他人に強いることなど不可能なのです。

続く三番目の文節も同じように四番目にかかっています。『智慧』とは仏教の叡智のことですが、万人の日常生活に於いてそれを活用した生き方という意味で解りやすく言えば『優しさ』に置き換えることができます。ですから、智慧を得ていくに従って優しさはどんどん深みを増し、その結果、自ずと諸悪をなさないことに繋がっていくのです。

頓悟頓入という仏語に表されるように、悟った瞬間に万事がOKという理想を我々は抱きがちです。はたまた神秘体験や格言めいた言葉の持つ一瞬の酔いに求道者は浸りがちです。お釈迦様は35歳で悟りを開かれ一切の迷いから出離されたわけですが、そこでお釈迦様の人生がぷつりと終わったのではなく、以後45年間をあらゆる人々との対話と説法に向けられました。頓悟あってこそその45年間と見るべきなのかもしれませんが、私はむしろその45年間を貫いたものに重要な意味が込められていると見えています。それは単調とも言える日々の精進の継続です。

原始経典に書かれている通り、悟りを開かれた以後もお釈迦様にとっては戦争による祖国の滅亡や、弟子の不始末、さらにはご自身の老いなど、客観的に観れば不安は必ず付きまどっていたはずですが、しかし、それであってもなお楽しく生きることができただという事を身を以て体現されたのがお釈迦様の教えであり、それを表明されたのが今回のお経の言葉です。

## 行事案内

詳細はまだですが、令和3年は久しぶりに本堂でコンサートを開きたいと思っております！

毎月28日の9時と3時から  
本堂にて柱源護摩供養

本山修験宗 大瀧山護国寺

781-2155

高知県高岡郡日高村九頭291

☎ 0889-24-7244

ホームページ

[gokokuji.site](http://gokokuji.site)

